

47.化学療法を受けている子どもの食行動

谷本未来

医学部附属病院 2階東病棟

1. 研究の背景と目的

化学療法を受けている子どもは、治療に伴う食欲低下、味覚変化などの副作用、さらには、制限の多い食事内容により食事摂取が困難となり、病院食は全く食べず、レトルト食品やファーストフードに頼っていることが多い。このような状況から、少しでも子どもに食べてもらおうと家族や栄養師と連携を取りながらメニューを工夫したり、子どもの免疫力に合わせて持ち込み食を許可するなど、個別に対応しているが、栄養摂取量の増加につながる効果的な介入方法は見いだせていないのが現状である。

本研究は、子どもが食事に対してどのような思いを持って対処行動を取っているのかを明らかにすることを目的とした。

2. 方法

小児がん、血液疾患にて化学療法を受けた13～17歳の子ども6名を対象とした。本院看護部倫理委員会の承認後、研究内容と結果の公表について説明、同意を得た上で、半構成インタビューガイドを用いた面接調査を行った。

3. 結果

1) 食事に関する思い

子どもは食事制限について『好きなものが食べられない』と感じており、医師や看護師から説明を受けることで、『仕方がないこと』と受け止めていた。治療に伴い嘔気や嘔吐、味覚変化を体験し、嗜好が変化しており、「味が変わって食べられない」「最初は食べられていたけどだんだん無理になった」と述べていた。その中で、持ち込み食に頼るようになり、持ち込み食は『ないと生きていけないもの』となっていた。

2) 食事に関する取り組み

子どもは、消化器症状が強い時には『無理に食べない』ようにしていた。治療を経験していくなかで、自分で食思や嗜好、全身状態を考慮しながら、家族や看護師に『食べられるものや食べたいものを伝える』、食べたいものを『作って/買ってきてもらう』『自分で買ってくる』『食事メニューを変更する』『調味料を足す』『外泊時に手作りのものを食べる』などの対処行動をとっていた。病院食に対しては、好みのメニューが出ることを楽しみにしたり、持ち込み食については「ファーストフードが食べられて嬉しい」と感じるなど『食事への楽しみ』を見出していた。その際に、家族の意見や家族が準備したものをそのまま取り入れ『準備されたものを食べる』事も多かった。

3) 食事に関する要望

子どもは、病院食に対して「子どもが食べられそうなものが出てこない」という意見が多く、「子ども用の味付けとメニューにしてほしい」「メニューの選択肢を増やしてほしい」と『制限食のメニューの改善』を希望していた。また、その他の要望としては、家族が作れる『調理場の提供』や、楽しい雰囲気の中で食事ができる『食事環境の調整』があった。

4. まとめ

子どもは食事制限について医療者からの説明を理解することで受け入れ、治療が進む中での体験や

家族・医療者の関わりによって自分なりの対処行動を見出し、主体的に食行動に取り組むことができるようになっていったと考える。主に対処行動が『持ち込み食に頼る』となっている現状にあり、子どもの成長発達を考えるとより栄養バランスを考えた食事を提供する必要がある。今後は、子どもたちが食べることを楽しみに思えるように、他職種と連携・協働し、家族と一緒に子どもの発達段階に合わせた援助を行っていくことが大切である。そして、子どもの栄養バランスを考えた食事支援や食事環境の調整への取り組みが必要である。

本研究は対象者が少なく、一般化するには限界がある。しかし、子どもたちの食事環境を少しでも改善できるように努めていきたい。